

# フィンランドにおける内戦認識の変遷

石野裕子

## はじめに——問題の所在

本稿は、フィンランド独立直後の一九一八年一月から五月にかけて戦われた内戦の呼称をめぐる問題に注目し、内戦研究の進展に伴う呼称の変容の経緯を歴史的段階ごとに考察することで、フィンランド人、とくに歴史研究者の内戦認識の変遷過程を明らかにすることが目的である。

現在、フィンランドは教育、福祉、ITといった分野で日本だけではなく世界で注目を集めている先進国であるが、その独立は一九一七年と遅く、それまでスウェーデンに六世紀の間、ロシアに一世紀の間支配されてきた歴史を持つ。また、一九一七年二月六日の独立宣言からわ

ずか一ヵ月後に、フィンランドは独立直後の社会を二分し、三万六〇〇人もの死者を出すことになる内戦に突入することになった<sup>\*1</sup>。その内戦の傷跡は独立以降も容易には癒えず、政治的にもデリケートなイッシュューとして近年まで扱われてきた。また、歴史研究の分野でも内戦研究は重要な課題であると認識されてきたものの、論者それぞれの内戦認識、あるいは政治的立場が内戦研究に影響を及ぼす状況が近年まで続いた。そのような状況はフィンランドの内戦が「内戦」と呼ばれなかった歴史に見いだせるであろう。

一般的に内戦とは「国内で戦われた戦争」を指すが、後に説明するようにフィンランドの内戦は国内紛争という意味だけではなく、独立直後に起こった戦争であり、外国軍も参加した戦争の側面を持ち、また、より狭い定義をする

と階級闘争の意味合いを持つといったようにさまざま要素を持ち合わせた戦争であった。そのような内戦に対する認識の違いゆえにその勃発直後から内戦を指すさまざまな呼称が誕生し、用いられた。これまでこの戦いは、一般的に内戦を意味する「内戦 (sisällisotat)」という呼称はあまり用いられず、「市民戦争 (kansalaisotat)」<sup>2</sup>「解放戦争 (vapausotat)」<sup>3</sup>「階級戦争 (luokkasotat)」<sup>4</sup>「独立戦争 (itsenäisyysotat)」<sup>5</sup>または「革命 (vallankumous)」<sup>6</sup>「反乱 (kapina)」<sup>7</sup>といった名で評され、呼称の違いが政治的立場の違い、すなわち支持政党の違いをも表す状況が続いた。とくに「内戦 (sisällisotat)」と「市民戦争 (kansalaisotat)」は、英語では civil war に相当する呼称であるものの、前者が「内部の戦争」というニュアンスがあり、スペイン内戦といった諸外国の内戦全般に対して用いられてきたのに対し、後者は「市民の」あるいは「民族の」というフィンランド特有の意味合いが強い呼称であり、この戦いだけに用いられてきたフィンランド独自の呼称でもある<sup>\*2</sup>。

このような多くの内戦の呼称が存在した一方で、後述するが勝者側の内戦史観を代弁した「解放戦争」という呼称が内戦後長らく一般に流布し、半ば公的に用いられた。このような勝者側の内戦史観は歴史研究の場でも根強く残っていた。

しかし、第二次世界大戦が終結すると、フィンランドの

歴史学界ではそれまでの歴史研究を全般的に見直す風潮が徐々に出始め、独立・内戦五〇周年にあたる一九六七〜六八年には、内戦に関する史料集・日記・回顧録などの書籍が数多く刊行されるなど内戦の実態を解明しようとする動きが生じ、敗者側の実態も調査されるなど内戦研究が進展した。そのなかで内戦の呼称の多様性について議論がなされたものの、内戦の呼称の統一にはいたらなかった。

再び内戦研究に注目が集まったのは冷戦が終結した一九九〇年代に入ってからである。フィンランド政府による内戦調査プロジェクトの発足や研究誌での内戦特集、さらにはこれまでほとんど取り上げられることがなかった内戦の敗者側の記憶に関する研究が登場するなどの動きがこの時期に見られた。二〇〇〇年代に入ると、内戦を体験していない若い世代による新たな内戦研究が登場し、二〇〇九年には一般読者向けの内戦書が刊行されるなど、ここ二〇年の間に歴史学界の枠に留まらず幅広い分野における内戦への注目がうかがえる。このような内戦への注目が高まるなか、フィンランドの歴史学界において従来のさまざまな呼称を再検討し、「内戦 (sisällisotat)」の呼称に統一させようとする動きが見られる。このような動きはどのような経緯で生じたのであろうか。

本来なら、フィンランドにおける内戦認識の変遷と時代動向との関係を明らかにするためには、フィンランドで刊

行されたすべての内戦研究およびフィンランド史概説書での内戦の呼称や描かれ方の変遷および時代動向との関係を丹念に追うべきであるが、さしあたり本稿では近年のフィンランド史研究に見られる内戦の呼称の変遷に重点を置き、内戦研究の進展のなかで内戦の捉え方が時代的段階においてどのように変容したのかを検討することで上記の関係を概観したい。

## I ささまざまな内戦の呼称の発生と定着

### 1 内戦の勃発と終結

はじめに内戦の勃発から終結までの過程に触れたい。フィンランドの内戦は、国内で白衛隊と赤衛隊の二つに分かれて戦われた戦争であった。白衛隊とは統治者側であった、いわゆるブルジョア階級を中心として結成された自警団が基になり、独立宣言後の翌年一九一八年一月一三日に社会の秩序を取り戻す目的で軍隊創設を決定した国会の決議によって、事実上合法化された軍隊であった。それに対し、赤衛隊とはブルジョア階級に反発する労働者階級を中心として結成された自警団が基になった軍隊である。両階級の溝はすでに一九世紀末の「ロシア化」政策に対する対

応の違いに見られ（石野二〇〇七：一三五―一三八）、さらに一九〇五年一〇月のロシア本国でのゼネストに刺激され、フィンランド全土で展開された大ストライキにおける要求の違いによってその溝は広がり、白衛隊、赤衛隊の前身である自警団がそれぞれ結成され、両者の間で武力衝突が勃発した。その後、一九〇六年にヘルシンキ沖合の要塞島ヴィアポリ（スヴェアポリ）駐屯のロシア軍兵士が革命を実現させようとして起こした反乱に一部の赤衛隊が参加し、革命を起こすためにゼネストを呼びかけた事件で白衛隊と衝突し、死者が出る事件にまで発展した。

さらなる衝突は、独立宣言以前の一九一七年一月一日から一四日にかけて、ロシア本国での一〇月革命に刺激を受けてフィンランドで発生したゼネスト時に起こった。このゼネストは、フィンランド社会民主党が掲げた「われわれは要求する」と題した共同声明で主張された現行フィンランド政府の退陣や八時間労働の実施などの要求の受諾を国会に迫るためのものであった。ゼネストは全国で展開されたものの、国会で一部の要求が受け入れられたため、社会民主党の決定によって途中で解除された（百瀬一九七四：六六―六七）。

以上のような一九一七年のロシアでの革命の勃発、その後の臨時政府の成立からソヴィエト政府成立へと続く統治国ロシアで起こった一連の出来事を契機として、一九一七

年一月二日六日にスヴィンフツドが率いるフィンランド臨時政府はロシアからの独立を宣言した。しかし、独立宣言後も第一次世界大戦の影響による失業や食料不足などの社会不安は解消されなかった。労働者階級はそのような状況下、フィンランドにおける社会的亀裂を「階級闘争」と位置付け、尖鋭的な態度をとった。両者の争いは翌年一月に内戦という形に発展した。赤衛隊は第一次世界大戦期にフィンランドに駐留し、独立宣言後に撤退を始めたロシア軍から武器支援をとりつけ、赤衛隊に義勇軍として参加したロシア兵も存在した（Hoppu 2009: 121）。赤衛隊は一時期首都ヘルシンキをはじめとする南部一帯を制圧し、革命政権を樹立したものの、政府軍にあたる白衛隊が徐々に革命軍である赤衛隊を打ち破り、主要都市を奪還した。また、スウェーデンからやってきた一〇〇人もの義勇兵が白衛隊側で戦った。四月三日には白衛隊側について約九五〇〇人のドイツのバルト師団がフィンランド南西部に上陸したことで戦局の展開は早まり、五月に内戦が終結した。

### 2 多様化した内戦の呼称と内戦研究の分裂

内戦終結後、勝者である白衛隊側の主張を代弁する「解放戦争」が公的な呼称として採用され、一般に流布するなかで学校教科書でもその呼称が用いられた。この「解放戦

争」という呼称は、白衛隊側に属する積極的反ロシア抵抗組織アクティヴィステイが内戦中に主張した呼称で、白衛隊が赤衛隊とそれを支持するロシアからフィンランドを解放することを意味した。また、「解放戦争」にはフィンランドの独立を達成させ、民主主義国家形態を完成させた「独立戦争」という意味も含まれた（Haapala 2009: 11）。さらに、白衛隊側は赤衛隊の行動を非難する意味で、彼らの行動自体を指して「反乱」「暴動」「国家反乱（valtorikos）」とも呼んだ（Haapala 2009: 12）。

一方、赤衛隊側は、独立宣言以前から内戦へと続く一連の出来事を「革命」と呼んだ（Haapala 2009: 12）。「階級戦争」という呼称も内戦中に赤衛隊側で用いられた呼称であるが、内戦終結後の一九二〇年代に入ってから、マルクス主義理論とともに共産主義の歴史記述において「革命」の呼称が特に頻繁に用いられた（Haapala 2009: 12）。

内戦勃発直後から新聞、雑誌等で用いられた「市民戦争」の呼称は、内戦終結後、主に白衛隊にも赤衛隊にも与しないとする「中立」の立場の者によって好まれたが、その一方で内戦の原因が分裂したフィンランド社会と内政にあったとし、革命はロシアまたはボリシェヴィキのためではなかったとする社会民主党の主張にも用いられた（Haapala 2009: 11）。

以上のように、内戦勃発時からそれぞれの政治的主張を

## Ⅱ 第二次世界大戦後における 内戦研究の進展

### 1 内戦の呼称への言及と根強い

#### 「解放戦争」史観

正当化するために、内戦はさまざまな呼称で表現されるようになった。しかし、前述したように内戦終結後、白衛隊の歴史認識が反映された「解放戦争」が内戦の公的な呼称となったことで、赤衛隊側の歴史認識は無視され、公共の言説から排除された。また、公的な呼称となった「解放戦争」は、赤衛隊の過激性や非人道性を否定しないことにつながったと指摘されるように (Peltonen 2009: 464)、敗者である赤衛隊側に立ったフィンランド人の社会的地位の回復を遅らせる要因ともなった (Peltonen 2009: 464-467)。

フィンランド政府は、内戦終結後に収容所に収監された赤衛隊の恩赦の実施 (Tikka 2009: 221) や、一九三〇年代には一月初旬の週を「和解週間 (Sovinnollisuuden viikko)」とし、内戦で分裂した社会をまとめようとする措置を行ったものの (Peltonen 2009: 464)、内戦当事者が体験した生々しい記憶は消えず、内戦を語ることは一種の「タブー」とみなされた。このような状況において内戦に関する研究は白衛隊側から見た内戦研究、あるいは赤衛隊側から見た内戦研究といったようにそれぞれのイデオロギーを帯びた研究に分かれていったのである。

を扱うことの難しさを強調した (Paasivirta 1947: 3)。同書では題名の通り一九一七年の独立にいたるフィンランドに焦点が当てられたため、内戦についての記述は少ないものの、パーシヴィルタは中立的な立場、すなわち赤衛隊側でも白衛隊側でもない立場を表明するために一般的な内戦全般を指す用語である「内戦」と表記し、フィンランド革命勢力とロシアの関係、スウェインフツヴド政権とドイツの関係といったフィンランドの外部との関係が内戦に与えた影響を指摘した (Paasivirta 1947: 202-203)。

パーシヴィルタは、一九四九年に刊行された戦後初の本格的なフィンランドの通史『フィンランド史概説』<sup>10</sup>において「フィンランドの独立」という章を執筆担当したが、ここでも内戦を「内戦」と記し、ロシアの影響を考慮しつつも国内の戦争として内戦を描写し、その一方で内戦における革命的要素についても言及した (Paasivirta 1949: 421-408)。さらに一九五七年には『一九一八年のフィンランド』を発表し、一九一八年の内戦前後のフィンランドの政治状況を詳細に分析したが、ここでも「内戦」の呼称を用い、さらには先行研究を「独立戦争文献」「階級戦争文献」と史料を二分し、従来の内戦研究が白衛隊側あるいは赤衛隊側の政治色を帯びたものであったと批判した (Paasivirta 1957: 373-379)。

以上のように、パーシヴィルタはそれまでの政治色を帯

第二次世界大戦でソ連と二度戦火を交えたフィンランドでは、終戦後、対ソ戦の原因を追究する動きが歴史研究において始まり (百瀬二〇〇六: 二二―二三、二五―二六)、その過程において国内問題の再考、すなわち自国史の見直しが行われ、とくにフィンランド共和国の出発点に当たる独立・内戦史の見直しが始まった。その過程で内戦の呼称についても言及がなされるようになった。

フィンランド史の見直しを図った先駆的存在といえるのが歴史学者ユハニ・パーシヴィルタである。パーシヴィルタは一九四七年に発表した二巻から成る『フィンランドの独立問題一九一七』で、戦間期に歴史研究において触れられることがほとんどなかったフィンランドの独立問題を取り上げた。序文でパーシヴィルタは、未だ「解放戦争」あるいは「階級戦争」の立場に属した歴史研究が多く存在し、中立の立場はまだ難しいと述べ、歴史研究で独立問題

びた内戦史観の見直しを主張したが、従来の白衛隊側の内戦認識を踏襲した形、あるいはそれに影響された形での自国史研究の方が主流であった。たとえば、一九五二年にタウモ・クオサが記したフィンランド史の概説書『フィンランド史——自治と独立フィンランド』はその典型的な事例としてあげられる。同書は、「解放闘争」「市民戦争」「内戦」といったさまざまな呼称を用いたものの、「解放戦争」としての内戦認識は残ったままであった。たとえば、『内戦』の勃発」という小題では、一九一七年一月の赤衛隊および白衛隊の動きが描写されたが、そのなかで「軍事委員会は、すでに前年に始まった解放闘争の準備を始めた (太字―筆者) (Kuosa 1952: 1312) というように、内戦勃発直前の白衛隊側の動きを白衛隊側から見た内戦認識を意味する「解放闘争」と描写した。しかし一方で、「迫りくる戦争がロシアに対する解放闘争の他に、市民戦争としての様相も呈する状況だったので、その勃発は最後の時までに避けようと試みられた (太字―筆者) (Kuosa 1952: 133) という記述から明らかのように、クオサは「解放闘争」以外に「市民戦争」の呼称も用いた。

次の小題「解放戦争」では、「解放闘争」から「解放戦争」への移行、すなわち戦争の規模が拡大する様子が描写されるが、そのなかでスウェインフツヴド摂政がドイツに援助を求め、それにマンネルヘイム将軍が抗した場面をクオ

サは、以下のように表現する。

「上述した理由以外にも最高司令官（マンネルヘイム将軍）はこのような提案に反対した。なぜならドイツから援助を受けてしまうと、ブルジョア階級がドイツの助けで自分たちの国の労働者階級に対して階級戦争をしたという主張の材料を赤衛隊に与えてしまうからだ（括弧、太字―筆者）」(Kuosa 1952: 1319)。

クオサは、以上のような表現で、「階級戦争」としての内戦認識が白衛隊側にも存在していたことを指摘した。次の小題「我々の解放の代償」では、以下のような表現も見られる。

「我々の解放戦争が内戦と同一だったことは最も重い損失であった。外部の敵に対する戦いから国内で戦われた戦争に、内戦すべての恐怖が付随してきたのである（太字―筆者）」(Kuosa 1952: 1324)。

「兄弟戦争は常に他の戦争よりもつらいものである。これも我々の解放戦争の側面であった（太字―筆者）」(Kuosa 1952: 1324)。

以上のように、クオサは内戦にはさまざまな要素が見いだせることを指摘したものの、「解放戦争」として内戦を描写したのである。また、赤衛隊側への偏見も見られた。

クオサは、赤衛隊について「赤衛隊の下級兵の大部分は平和的で実直な労働者の要素があり、彼らは心から新しくよりよい社会のためと思い、戦った。しかし、集団には社会のアウトサイダー的要素もあった。彼らは優勢状況を利用して、信じられない暴力行為を遂行した」(Kuosa 1952: 135)と批判した。クオサは白衛隊側の問題も指摘してはいたものの (Kuosa 1952: 1324-1325)、基本的に両大戦間期の白衛隊側の内戦認識を引きずった形の描写にとどめている。さらに、クオサは「時を経て兄弟戦争の斧の傷は癒され始めた。また旧赤衛隊側の人々は革命を起こしたことは間違いであったことを認めた（太字―筆者）」(Kuosa 1952: 135)と記述し、赤衛隊側の「反省」を描写した。

このような戦間期における白衛隊側の歴史認識を残したフィンランド史概説書が刊行される状況をよそに、文学の世界では内戦研究では扱うことが難しかった敗者側の視点を題材とする小説が次々誕生し、さまざまな立場から表現された。なかでも一九五九年から六二年にかけて発表された、ベストセラーとなったヴァイノ・リンナの小説三部作『ハル北極星の下』(Linna 1959, 1962)はその代表といえる。リンナは、この小説を発表する以前の一九五四年に、

兵士の視点から第二次世界大戦期に勃発した継続戦争の状況を描いた小説『無名兵士』(Linna 1954)でフィンランド社会の間で大きな反響を得ており、これまであまり描かれてこなかった市井の人々の視点からフィンランド史を見直す姿勢を『ここ北極星の下』においても貫いた。独立以前から第二次世界大戦期において運命に翻弄されたトルンパリ一家の生涯を描いた同書の第二部で、リンナは内戦期に赤衛隊に加わったトルンパリを中心に話を展開し、赤衛隊側から内戦を描写した。同書は、『無名兵士』と同様に大きな反響を呼んだ (Varpio 2009: 453-456; Schoolfield 1998: 200)。

## 2 フィンランド独立・内戦五〇周年における内戦研究

内戦研究に大きな転機が訪れたのは、フィンランド独立・内戦五〇周年の年にあたる一九六七年から一九六八年にかけての時期であった。この記念の年に関係史料の公刊や研究書の刊行、内戦体験者の語りの記録が行われ、赤衛隊の実態を明らかにしつつも、イデオロギー色を排す試みをした研究が登場した (Tommila 1998: 186-187)。

そのような状況下、フィンランド独立・内戦期におけるフィンランド・ソヴィエト関係に注目した研究が登場し

た。一九六七年に刊行されたトゥオモ・ボルヴィネンによる『ロシア革命とフィンランド――一九一七年二月から一九一八年五月』はその代表的研究である。同書は、フィンランド側だけではなくロシア（ソ連）側の史料を用いて一九一七年に勃発した二月革命から一九二〇年のタルトゥ条約までのフィンランド・ソヴィエト関係を考察した研究であり、内戦のみに注目した研究ではなかったが、ロシア革命がフィンランドの内戦に与えた影響、内戦時における実際のロシア軍と赤衛隊との関係、レーニンと連邦問題といった観点から白衛隊とドイツとの関係、東カレリア問題におけるドイツの関心を指摘した点で、従来の研究には見られない視点を提供した研究であった。

序文で、ボルヴィネンは三年前に出版した継続戦争に関する研究の末尾で、ソ連とフィンランド間の関係には「双方の側の疑いが支配する壁」があることを指摘し、その「壁」が登場するにいたった歴史を「一度徹底的に手術の痛みを避けずに、厳密かつ客観的に明らかにすべきである」と書いたことをあげ、その時から自身の関心はソヴィエト政権と独立フィンランドが誕生し、後に発展する基礎が形成された時期である一九一七―一九二〇年の革命の時代に向いたのであったと述べた (Pohinen 1967: Esipuhe 2)。このようにボルヴィネンは、フィンランド史の見直しの過程でこれまで歴史研究において避けられてきた内戦

について何が起こったのかを「手術の痛み」をもってしても明らかにすべきであるとし、対ソ関係を軸に内戦の実情を考察した。同書でポルヴィネンは、一〇月革命がフィンランドの労働運動の過激化に著しく影響を与えたとし、ロシアによる内戦への影響の大きさを指摘した (Polvinen 1967: 202)。さらに、ポルヴィネンは、ポリシェヴィキには「兄弟への態度」、すなわちフィンランド赤衛隊への態度には一貫性が欠けていた点 (Polvinen 1967: 208) や、フィンランド政府がフィンランドを内戦後、スラヴに対する「中央ヨーロッパの前哨地帯」とみなした点 (Polvinen 1967: 257) を指摘するなど内戦のさまざまな側面を浮き彫りにした。

同書でポルヴィネンは、内戦期におけるロシア・フィンランド関係およびフィンランドに駐留したロシア義勇兵の動きを描きだすことに集中し、内戦そのものを描きだすことを目的としていなかったため、呼称問題に言及しなかったといえるが、小題に「ロシアとフィンランドの一九一八年の戦争の初期段階 (太字―筆者)」 (Polvinen 1967: 196) と表現したり、「トロツキーによって三月に開始された軍隊改革は、もはやフィンランドの一九一八年の戦争の運命に影響しなかった (太字―筆者)」 (Polvinen 1967: 269) と表現したりしている。このように、歴史研究書において内戦を「フィンランドの一九一八年の戦争」 (Suomen 1918

留していたロシア軍の問題を指摘し、内戦はロシアとの戦いという側面があったという「解放戦争」の主張の一部に同意した (Rasila 1968: 13)。

また、ラシラは「解放戦争の背景に関して」という小題を設け、一九世紀末から始まった「ロシア化」政策の影響でフィンランドが独自の民族運動を展開し、その過程で国内の分裂が起こったとした。さらにラシラは、第一次世界大戦勃発後、フィンランドがロシアの前哨地と化し、一九一七年の八月には一〇万人ものロシア兵が駐留した事実をあげ、そのような状況下、フィンランドが独立を志向した時、戦いの矛先はフィンランド駐留のロシア軍に向けられたのであるとし、内戦には対ロシア戦争の側面があったと繰り返し指摘した (Rasila 1968: 12-14)。また、一〇月革命によってロシアのポリシェヴィキ政権とフィンランドの革命的社会主義組織が結び付き、一つの「赤い敵」となり、解放とフィンランド独立に反対する敵として白衛隊の目には映ったと述べ、「解放戦争」にはこうした歴史的背景があったと主張した (Rasila 1968: 13)。

その一方で、ラシラは、内戦に「階級戦争」の特徴も見出せるとも述べる。次の小題「市民戦争の背景に関して」ではその題名とは異なり、はじめに「市民戦争に関してでは赤い反乱、階級戦争という呼称も用いられる (太字―筆者)」 (Rasila 1968: 14) と述べ、マルクス主義の思想が反

sota)」、または「一九一八年の出来事 (Vuoden 1918 tapahtumat)」と表記することで、呼称をめぐる政治的議論を避ける風潮が一九六〇年代から見られた (Peltonen 2009: 46<sup>\*16</sup>)。

さらに「市民戦争」の呼称を用いて、内部的要因を重視してこの戦いを考察した研究者もいた。ヴィルヨ・ラシラは、一九六八年に『市民戦争の社会的背景』を発表したが、その題名からも明らかなように「市民戦争」を内戦の呼称として採用した。

序文で、ラシラはトルッパリ解放史の関心からトルッパリ問題と「市民戦争」の関係に注目し、「市民戦争」の社会的背景をテーマにする<sup>17</sup>と記した上で、内戦の特徴はすでに多くの歴史研究や文学によって知られているので、同書では教区の名簿に関する史料などを用いて純粹に統計学的視点から考察すると述べた (Rasila 1968: 7)。ラシラは、赤衛隊側であったとされたトルッパリ層に注目することで赤衛隊の実情を考察し、トルッパリ層すべてが赤衛隊側に身を投じたわけではなく、主人の富農層側、すなわち白衛隊側についたトルッパリもいたことを統計から明らかにした。ラシラは、すべての国における市民戦争はたいがい権力掌握の試み、すなわち革命的奪取が出发点であるが、フィンランドの「市民戦争」にはそのことに加えて他の問題も存在すると述べ、内戦勃発時にフィンランド国内に駐

映されたそれらの呼称を、フィンランドの社会民主党系の労働運動が二〇世紀初頭に受け入れたと、「階級戦争」の呼称が用いられた歴史を描写する (Rasila 1968: 14)。加えて、二月革命がフィンランドの労働運動に与えた影響を検討し、フィンランドの革命の成功はロシアのポリシェヴィキ勢力と結び付けられて考えられた点、すなわち内戦の「階級戦争」の側面を描写した (Rasila 1968: 17)。つまり、ラシラは「市民戦争」の呼称を採用したものの、内戦には「解放戦争」「階級戦争」両方の特徴が見出されると主張したのである。最後にラシラは、赤衛隊側は社会組織の変化のために戦い、その一方で白衛隊側はロシア軍の解体を目的としたが、同時に現行の社会組織保持のためにも戦ったと内戦を分析し、外的要因も存在したものの国内に存在した恐怖が「市民戦争」を引き起こしたと結論づけた (Rasila 1968: 153)。以上のような内戦の内的要因に関する研究は、この時期に本格的に始められ、同時にその解釈も学問的な組上に載ることとなった<sup>\*18</sup>。こうした状況を反映して同時期に、フィンランド社会においても公的な呼称である「解放戦争」だけではなく、「市民戦争」の呼称が中立的な立場を表明するとしてなかば公式的に使われ始めたが、学校教科書では「解放戦争―市民戦争」と表記されるなど「解放戦争」の呼称は消えずに残ったのである (Haapala 2009: 11)。

### 3 内戦の呼称に注目した研究の登場

一九八二年になって内戦の呼称そのものに着目した研究『解放闘争、市民戦争と反乱』が登場した。博士論文を基にした同書で著者のトゥロ・マンニネンは「内戦の最も適した呼称をつける試みではなく」(Manninen, T. 1982: 3)と前置きした上で、内戦期に白衛隊側が自分たちの陣営を正当化するために内戦の呼称を変更した過程を、内戦期に発行された新聞・雑誌に登場する内戦の呼称の統計および反ロシア抵抗組織アクティヴィステイの日記などの史料を基に明らかにした。

同書によると、「解放闘争」または「解放戦争」という呼称には内戦勃発以前の一九〇六年から一九一〇年の間にブルジョア側で発生した思想、すなわち社会主義者は支持者を犯罪と無秩序へと扇動し、フィンランドの文化、社会機構、内的独立を危険にさらすといった白衛隊の思想が根底にあった (Manninen, T. 1982: 715)。また、このような考えは特に積極的反露抵抗組織アクティヴィステイと一九一五年からドイツで軍事訓練を行ったアクティヴィステイの一派であるイエーガー隊との間でも共有され、ロシアと赤衛隊に対する敵対心を深めた (Manninen, T. 1982: 223)。その一方で、白衛隊の総司令官マンネルヘイムはこ

文明の前哨地としてフィンランドは野蛮なポリシエヴィキ・ロシアと戦うという一部のスウェーデン語系フィンランド人の思想や、戦闘なしに独立を達成した国はないとする一九世紀初期のナシヨナリストたちの思想による影響が存在したとマンニネンは指摘する (Manninen, T. 1982: 223)。しかし、フィンランドの白衛隊寄りの新聞・雑誌を地域ごとに詳細に調べた結果、そのような白衛隊側の思惑をよそに新聞・雑誌では「解放闘争」「解放戦争」の呼称に加え、「市民戦争」「内戦」も用いられるなど呼称の統一は見られなかった (Manninen, T. 1982: 147)。内戦においてロシアが占める位置が減少しつつあったのに反して、フィンランド国内の反ロシアのプロパガンダは強化され、それが「解放戦争」という呼称につながったというマンニネンの研究は、「解放戦争」の呼称が持つ政治性を明らかにし、かつ「解放戦争」の呼称使用への疑問を投げかけたものであった。

### 4 冷戦期の対ソ関係とフィンランドの歴史研究

前述したように、第二次世界大戦後、フィンランドの歴史学界では自国史の見直しが行われたが、その背景には自国史の見直しにおいて欠かすことができないロシア(ソ連)との関係史への関心の高さが存在した。百瀬宏(一九

の戦争を「市民戦争」だと認識し、白衛隊の支配外の地域のブルジョア系新聞も同様に「市民戦争」という呼称を当初は用いた (Manninen, T. 1982: 97-98)。しかし、三月から四月にかけてドイツ軍の介入と東カレリア遠征という二つの問題が浮上したため、マンネルヘイムおよびブルジョア政権は、この二つの問題を正当化するために「解放戦争」として内戦を認識せざるを得なかった (Manninen, T. 1982: 97-98)。なぜならば、「解放戦争」はフィンランド反乱軍と彼らを支援するロシア軍に対する戦いを意味したが、同時にロシア本国との戦いをも意味したからであった。ドイツ軍のフィンランドの内戦介入について、白衛隊側は「解放戦争」という呼称の下にドイツ軍はフィンランド国内の内的事情のために介入するのではなく、「ポリシエヴィキの暴徒たち」であるロシア人をフィンランドから追い出すために介入するのであると主張した (Manninen, T. 1982: 222)。さらに、白衛隊側は三月中旬になされた東カレリア遠征について、フィンランドはロシアと戦争状態にあるため宣戦布告なしでフィンランド軍が東側国境を超え、東カレリアで軍事行動を開始できると解釈することで東カレリア遠征の正当性を訴えた (Manninen, T. 1982: 101-103)。以上のような主張には、赤衛隊との闘争は解放のための戦いであり、国家の自由のための戦いであったという一貫した白衛隊の思想が根底にあり、さらには、西欧

七四) がすでに指摘したように、そのような関心の背景には戦後のフィンランドの政治や社会の変化という具体的な事実の影響が存在するといえる。百瀬の言葉を引用すると、両大戦間期においてフィンランドでさかんであった極右運動や反ソ運動が戦後に姿を消し、逆に戦前に非合法化された共産党が復活し、他の諸分子とともに人民民主同盟を形成して、一九六六年以来ケッコネン大統領下の内閣に閣僚を送っているという事実が存在した(百瀬一九七四・三〇九)。同時に外交面で一九四八年にソ連と「友好・協力・相互援助条約」を締結し、一面列強の利害紛争に対する中立を国是とすると同時に、フィンランドに対する、あるいはフィンランドを経由したソ連に対する攻撃については、必要な場合にはソ連邦の援助を得てこれに抵抗する条約上の義務を負っている、というきわめて特殊な国際的地位にあった(百瀬一九七四・三〇九)。以上のような東西冷戦下におけるフィンランドの対ソ関係は、少なからずフィンランドの歴史学の方向性に影響を与えたといえよう。つまり、両大戦間期にフィンランドにおいて根強かったソ連への偏見を戦後に排除する風潮、さらには社会主義への理解という政治的課題が歴史研究に影響を与えたのではないだろうか。このことは、これまで根強かった赤衛隊への偏見の排除にもつながり (Peltonen 2009: 467, 469-471)、白衛隊側あるいは赤衛隊側という一方的な立場に立脚した研究か

ら脱却する契機となったのである。

その一方で、ケッコネン大統領がレーニンの民族主義の綱領をフィンランド独立及び自決権と付带的にあげるなど、冷戦期に外交上のニーズが歴史記述に圧力を与えたというフィンランドの歴史学者アヒティアイネンとテルヴォネンの指摘が示しているように (Ahtianan & Teronen 1996: 122)、冷戦期におけるソ連との外交関係がフィンランドの歴史研究に少なからず影響を与えた側面は否定できないだろう。しかし、対ソ戦争の原因追究をめぐって生じたフィンランドの戦争責任論に付随した民族的「自省」および小国が大国間で共存するための特性を理解したいとする願望が一九六〇年代から歴史研究で強調されるようになり、それゆえ、フィンランドの自治時代、独立時代の右翼運動と民族思想、冬戦争から継続戦争への進展といったテーマがフィンランド政治史研究において人気となったとも指摘される (Ahtianan & Teronen 1996: 123)。すなわち、いわゆる冷戦の「呪縛」はフィンランドの学術的研究においても見出せるものであったが、それらは完全に「政治的バイアス」に覆われていたわけではなかった。フィンランドの学界は冷戦期においてソ連との関係史そのものの研究を控えるのではなく、むしろ積極的に隣国との関係史に取り組んだのであり、その研究過程において内戦研究も進展していったのである。

1993a: 12)、この戦争の真実を描くことを宣言した。そのため、ユリカンガスは内戦当事者の証言や手記などをつなぎ合わせて、当時の内戦の様子を再現する手法をとった。

ユリカンガスは、スペイン内戦やヒトラーの時代のほうがフィンランドの内戦に比べて被害の大きい「悲惨」な状況だったと認識されているにもかかわらず、なぜフィンランドの内戦の出来事が覆い隠されてきたのかと疑問を呈し、それに対してフィンランドでは政府権力がドイツやスペインのように急速に変化しなかったからだという仮説を立てた (Ylikangas 1993a: 525)。つまり、ユリカンガスは、フィンランドの内戦はより「悲惨」なスペイン内戦などよりも研究対象としては取り組みやすいはずなのに、フィンランドの学界がこれまであまり取り組んでこなかった理由をフィンランドの政治状況に見出したのであった。ユリカンガスによると、フィンランドでは旧来の支配的な政治組織が一九一八年以降も続いたので、学術研究において内戦研究は端に置かれたままであった、すなわち従来の政治組織が内戦後も変更されることなく続いたため、勝者側、すなわち白衛隊側の認識が正しいとされた政治状況が続き、それゆえ包括的な内戦研究がなかなか進まなかったという (Ylikangas 1993a: 525)。また、同書の目的として、ユリカンガスは真実をさらすことで白衛隊側の「重荷」を下し、一九一八年の出来事を覆い隠すのに用いられた社会的エネ

### III 冷戦終結後の内戦認識

#### 1 オーラル・ヒストリー研究における内戦の呼称

冷戦終結後の内戦研究の特徴は、大きくわけて二つの関心から生じた研究に分類できる。一つは、内戦の参加者の手記や体験談などの分析から内戦のトラウマに焦点を当てた研究で、一九九〇年代にアメリカなどで注目されたオーラル・ヒストリーの手法を取り入れ、応用された研究でもあるといえる。もう一つは、内戦の呼称自体を問い直す研究で、呼称の政治性を打破しようと試みた研究である。

一九九三年にヘイツキ・ユリカンガスが発表した『タンペレへの道——フィンランドの内戦におけるタンペレ制圧時の戦争過程に関する記録描写』は、前者の先駆的研究として位置づけられよう。同書で、ユリカンガスは内戦でこれまで優勢であった赤衛隊が白衛隊に決定的な敗北を期した一九一八年四月のタンペレ市街戦に焦点を当て、参加者の手記などの史料や証言を基にタンペレ制圧時の様子を明らかにすることで「白衛隊側の英雄物語を描くのではなく、革命の名声を取り去ろうとするのではなく」(Ylikangas

ルギーからの解放を執筆の動機に挙げた (Ylikangas 1993a: 526)。ユリカンガス自身が考える「真実」を明らかにすることで内戦のトラウマを癒そうとした同書は、内戦についての議論をフィンランド人の間で引き起こすきっかけとなった (Peltonen 2009: 469-470)。内戦の呼称についてユリカンガスは、フィンランド独自の内戦を意味する「市民戦争」という呼称は、ドイツ人、スウェーデン人、ロシア人といったフィンランド人以外の民族も参加した戦争にはふさわしくない呼称であると述べ (Ylikangas 1993a: 525-526)、内戦全般を意味する「内戦」の呼称を用いた。

ユリカンガスの研究のように内戦のトラウマに焦点を当てた研究は、若い世代へと引き継がれ、なかでも、ウツラ・マイヤ・ペルトネンが一九九六年に発表した『赤衛隊反乱の記憶——一九一八年以降のフィンランド労働者階級の語りの伝統形成に関する研究』は、赤衛隊側の内戦の記憶という新たな視点を提供した。冒頭でペルトネンは、一九一八年の問題は長らく学界において難しい問題であり、さまざまな呼称で内戦が呼ばれる状況にあったが、他方で勝者の視点を受け入れた内戦研究が続いたと指摘し、フィンランドの学界における内戦研究のあり方を批判した (Peltonen 1996: 14-15)。さらに、二〇〇三年にペルトネンは内戦期のオーラル・ヒストリーと歴史解釈の問題をテーマにし、暴力的な社会対立からの回復を研究目的とした

『記憶の場所——フィンランドにおける一九一八年の内戦の記憶と忘却』を発表した。同書で、ペルトネンをはじめに「この戦争の名称問題には触れない」と宣言し、自分は「内戦」および「市民戦争」の呼称を使用すると宣言した (Peltonen 2003: 24)。つまり、ペルトネンは政治的議論を避けるために内戦の呼称を「内戦」と限定したのである。

このような呼称をめぐる政治的議論を避ける姿勢は、一九九〇年代終わりから二〇〇〇年にかけてペルトネンだけではなく他の歴史研究にも見られた。つまり、内戦の呼称をめぐる議論を避けるために「内戦」の呼称を用いた研究が登場したのであり、それゆえ「内戦」の呼称が政治色のない呼称として認識されるようになったのである。

## 2 『史学雑誌』における内戦の呼称をめぐる議論

フィンランドの歴史学界全体が内戦の呼称そのものを対象とした議論に正面から取り組んだ姿勢を見せたのは、一九九三年第二号の『史学雑誌』で組まれた特集「一九一八」においてであった。特集では、「市民戦争」「反乱」「階級戦争」「内戦」「革命」「解放戦争」の六つの内戦の呼称に対してそれぞれ論者が立てられ、その呼称の持つ意味が論じられた。特集の編者であるペルッティ・ハッッパラ

は、「一つの真実か多くの真実か」という前書きで、この特集の目的は内戦の一番適した正しい呼称を考える競争ではないと明言し、真実は一つではなくたくさん存在すると述べ (Haapala 1993a: 2)、多面的に内戦を見直すことの必要性を強調した。ハッッパラは、同年四月一日にフィンランド歴史学協会で開催されたセミナー「戦争とは何か」にも参加した各論者が内戦について異なる説明をするのは、異なる視点をそれぞれ有しているだけではなく、その出来事の多面性が存在するためであると述べ、「おそらくすべての戦争にとつて提供された呼称は正解であり、間違いでもある」 (Haapala 1993a: 2) と指摘し、内戦の呼称の統一を避けた。この特集でハッッパラは「階級戦争」の章を担当し、独立以前の一九〇〇年代初頭、フィンランドが「階級社会」であったこと、すなわち戦争以前からの階級分裂を指摘することで内戦の「階級戦争」の側面を描写したが (Haapala 1993b: 105-110)、同時に一九一八年の戦争を「階級戦争」と呼ぶのは、内戦の一部の説明にはなるが限定的な説明でもあることを強調し、自分はこの呼称を支持するわけではないと述べた (Haapala 1993b: 105)。

「反乱」の章を担当したヤリ・アーンルートも内戦に存在した「反乱」の側面を指摘したものの、「反乱」の呼称を支持するわけではなかった (Ehnröoth 1993: 102-105)。冒頭で、アーンルートは「内戦」という呼称はすべての特

徴を十分に含んでいないと述べ、おそらく唯一の一般的な呼称といえるのは「フィンランドにおける一九一八年の戦争」 (Vuoden 1918 soita Suunnesta) という呼称であろうと述べた (Ehnröoth 1993: 102)。「革命」を論じたリスト・アラプロは、「フィンランドの『市民戦争』は、国家権力をめぐる戦いで、そこに階級を土台として組織化された団体が国の中心部を掌握したと考えると革命であった (太字―筆者)」 (Alapuro 1993: 114) と、内戦における「革命」の側面を描写したが、同章でアラプロ自身は内戦を「市民戦争」の呼称で表現した (Alapuro 1993: 114-116)。

前者の三人とは反対に、特定の呼称を支持する姿勢を見せた研究者が三人いた。その一人は、「市民戦争」を論じたセツポ・ヴァイサネンである。ヴァイサネンは、前述したトゥロ・マンニネンの研究を引用して「市民戦争」の呼称が内戦中に両陣営で用いられた経緯を指摘しつつ、内戦における「市民戦争」の側面を描写したが、そのなかで「内戦」の呼称はロシアの出来事と結びつけて用いられた呼称であり、「市民戦争」よりも異例な呼び名であり、すなわち一般的ではないと指摘した (Väisänen 1993: 102)。ヴァイサネンは、「内戦」という呼称を使用する者は、最後には歴史的に内的にも正しい呼称である「市民戦争」の呼称を認めるだろうと指摘し (Väisänen 1993: 102)、「市民戦争」の呼称を支持した。

二人目は、前述したようにタンペレ市街戦における参加者の記憶に焦点を当てた研究を発表したユリカンガスである。「内戦」を論じたユリカンガスは、はじめに「私は一九一八年にフィンランドで行われた戦争を内戦という呼称で呼ぶことを支持する (太字―筆者)」 (Ylikangas 1993b: 110) と明言した。ユリカンガスは、歴史家には「中立」の視点が必要であると述べ、一八六〇年代のアメリカ内戦、一九三六―三九年のスペイン内戦、一九二〇年代のロシアの内戦を例に挙げ、フィンランドの内戦も上記の戦争と共通の呼称が必要であると主張した (Ylikangas 1993b: 110)。スペインの内戦にイタリア人、ドイツ人、ロシア人、イギリス人、フランス人が参加したように、「内戦」という呼称には外国軍の参加も含まれるため、「市民戦争」ではなく「内戦」がふさわしいと、前述した一九九三年の研究での主張を繰り返した (Ylikangas 1993b: 110; Ylikangas 1993a: 525-526)。また、「階級戦争」の呼称についても、ユリカンガスはドイツの内戦への介入や白衛隊が有した「大のロシア嫌い」というイデオロギーを挙げ (Ylikangas 1993b: 113)、ロシアがフィンランドの独立に反対しておらず、またフィンランドの労働者を戦争へと駆り立てもしなかったと指摘し、以上の点からこの呼称もふさわしくないとした (Ylikangas 1993b: 113)。最後に、ユリカンガスは赤衛隊の蜂起は間違っていたのか、あるいは正



しかつたのか、白衛隊の勝利はフィンランドにとつてよかつたのか、悪かつたのかという判断は歴史研究の範疇ではないと述べ、研究者は「中立」と比較の努力をするべきであり、「中立性」とその内容の広さから「内戦」という呼称を用いるべきだと主張した (Ylikangas 1993b: 114)。<sup>\*25</sup>

三人目は、自身が論じた「解放戦争」の呼称を支持したオフト・マンニネンである。マンニネンは、赤衛隊側で戦つたロシア兵は、一九八〇年代のアフガニスタンと同様に国際的義務を果たすために国境の向こう側で戦い、同時にロシア、とりわけサンクト・ペテルブルグを守るために戦つたと主張した (Manninen, O. 1993: 117)。「市民戦争」の呼称は赤衛隊側の人々にとっては重要であるが、彼らはフィンランド人の一〇分の一にしかすぎず、残りの一〇分の九のフィンランド人にとつて戦争は民主主義のフィンランド社会とソヴィエト・ロシアの膨張との間の戦いであつたと主張した (Manninen, O. 1993: 120)。マンニネンは一九一八年一月にフィンランド・ロシア間で実際に戦争が勃発したと一貫して主張し、内戦は実際にフィンランドが独立を達成し、維持することを決定づけた「解放戦争」だと主張した (Manninen, O. 1993: 120)。

以上のように、『史学雑誌』の内戦特集では内戦をさまざまな角度から見直す努力がなされたものの、内戦の呼称に関するコンセンサスは得られなかつた。しかし、この特

集は内戦の呼称に関する議論が歴史学界で公に議論されるようになったことを意味するといえるであろう。

### 3 公的機関における内戦調査と内戦の呼称

一九九三年ごろから歴史学界で内戦の見直しが進められるなか、フィンランドの史料館が一九一八年に関するオーラル・ヒストリーやフォークロアの収集に乗り出すようになり、フィンランド政府自体も内戦に関する調査に乗り出した。一九九八年から二〇〇三年にかけて、七五〇万マルッカ(約一億五千万円)の国家予算を投じたパーヴォ・リッポネン首相と総理府が設置した専門家チームによるプロジェクト「フィンランドの戦争犠牲者一九一四〜一九二二年」はその最たるものである。このプロジェクトでは、第一次世界大戦および内戦における犠牲者の名前と犠牲者数の調査が開始され、その成果として一九一四年から一九二二年の間に亡くなった戦争犠牲者に関するデータベースが作成され、インターネットでも一般公開された。<sup>\*26</sup> プロジェクトの主導者であるラース・ウエステルンドによると、第一次世界大戦、一九一八年の戦争におけるフィンランド人および外国人の犠牲者について研究するだけでなく、一九一八年の戦争で生じた民族的トラウマを最終的に克服することがこのプロジェクトの目的であるとされた。<sup>\*26</sup>

また、二〇〇〇年にフィンランド国立博物館における内戦部門の設置や、公的私的を問わず存在する内戦の墓地の分布図の作成を行うプロジェクトが立ち上げられ、内戦の見直しを政府が資金的に後押しするようになった (Peltonen 2009: 469)。これら一連のプロジェクトでは「内戦」の呼称が採用された。

### 4 二〇〇〇年以降の歴史研究における内戦の呼称

上記のプロジェクトの参加者による内戦研究が次々と出版され、内戦研究が再びさかんになる一方で、フィンランド史概説書の出版も相次いだが、二〇〇〇年代以降に出版されたフィンランド史概説書すべてが必ずしも「内戦」という呼称を用いたわけではない。

たとえば、ヨウコ・ヴァヒトラは、自身が記したフィンランド史概説書に「解放のための赤衛隊と白衛隊の戦争(一九一八)」という小題を設けたが、ここでは「内戦」の呼称を用いず、「市民の間での一〇〇日間もの内部の戦争であった市民戦争(太字―筆者)」(Vahola 2003: 295)という表現で「市民戦争」の呼称を用いた。しかし、ヴァヒトラが内戦を明確に「市民戦争」と描写した箇所はこの一カ所しかなく、内戦の呼称についての自説の展開はな

かつた。その代わりに、ヴァヒトラは「独立と国家の解放を守る」(Vahola 2003: 293)という白衛隊側の主張だけではなく、労働者階級側も「自分たちの力とその社会的権利の実現のための解放を求めた」と述べ (Vahola 2003: 295)、白衛隊、赤衛隊双方の主張を描写することで内戦の持つさまざまな側面を指摘した。

二〇〇九年には一般読者向けに研究者たちが内戦をさまざまな角度から取り上げ、執筆した『内戦小辞典』が刊行された。<sup>\*30</sup> はじめに編者の一人であるペルッテイ・ハーツパラは「内戦」の呼称をこの書籍の題名にした理由を、呼称にまつわる政治色を避けるためとし、「もし『解放戦争小辞典』もしくは『市民戦争小辞典』を執筆したならば、我々は戦争の政治的視点を選択したことになろう」と述べ、一九一八年に実際に何が起つたのかということを抜きに内戦の呼称には政治的な歴史が存在すると指摘した (Haapala 2009: 10)。一九九三年の『史学雑誌』での主張とは異なり、ハーツパラは内戦にはさまざまな性格が見いだせるので、それゆえ多くの呼称が存在したことを認めたものの、「内戦」という呼称にこだわった。

近年はフィンランドの内戦を諸外国の内戦と同様に「内戦」と呼ぶことが、歴史学界で定着しているように見受けられる。たとえば二〇〇六年にヘンリック・メイナンドーが記した『フィンランド史』でも小題ですでに「内戦」の

呼称が用いられている (Meinander 2006: 152-158)。しかし、学校の歴史教科書において、「解放戦争——市民戦争」「内戦」の呼称が入り混じって用いられる状況は一九六〇年代からさほど変化しておらず、「内戦」の呼称の統一はまだ徹底されていない状況にある。<sup>\*31</sup>

## おわりに

以上のようにフィンランドの内戦の呼称はその勃発時からさまざまな言い方が用いられ、それぞれが政治的な立場を表したり、正当性を主張したりする状況が続き、内戦後は勝者側の政治的立場をとった「解放戦争」が、公的な呼称としてフィンランド社会に普及した。第二次世界大戦後、対ソ関係史の見直しの一環として自国史研究が進められるなかで研究の対象として内戦が注目され始め、政治的立場を超えてより「客観的」に内戦時に何が起こったのかを明らかにしようとする試みがなされ、一九六〇年代以降、フィンランド独自の内戦を意味する「市民戦争」の呼称が半ば公的な呼称として用いられることもあった。しかし、その一方で、「解放戦争」認識に立脚した歴史認識はなかなか消えることはなかった。一九八二年のトゥロ・マニネンの研究によって内戦の呼称がどのように取捨選択

されたのかという事実関係が明らかになり、呼称に付随する政治性が指摘された。冷戦終結後には、これまで文学の世界でのみ扱われてきた内戦の痛みやトラウマについての研究が始められると同時に内戦の呼称を再検討する試みがなされ、フィンランドの内戦の呼称をめぐる議論は九〇年の時を経た現在、「内戦」の呼称に統一する形で終着するかに見える。

フィンランド人にとって自国の内戦をどう呼ぶかという問題は、政治的立場を表明するだけでなく、独立から内戦へと続く一連の出来事に対する認識、すなわち自国の歴史認識を問う直す問題でもある。内戦の呼称をめぐる長年の議論を経て一般的な内戦を指す呼称で自国の内戦を呼ぶとする近年の試みは、フィンランド内部で勃発した戦いそのものを率直に内戦と呼べない状況から脱却する一歩を踏み出したとみなすことができるだろう。このことは旧ソ連・東欧諸国とは異なりフィンランドでは内戦認識、すなわち自国史が政治の問題ではなく、歴史問題として議論されるようになったことを意味するのではないだろうか。しかし一方で、内戦の実証的な研究が近年進展しているのに対して、フィンランドで勃発した内戦自体をどのように捉え、自国史に位置づけるのかという課題に関してはあまり取り組みがなされていないように見える。その点を中心に、今後の内戦研究の進展に注目したい。

## ●注

\*1 内戦の犠牲者の数は資料によって異なるが、後述するプロジェクト「フィンランドの戦争犠牲者一九一四〜一九二二年 (Suomen sotasurmat 1914-1922 tukinnsprojekti)」によると、約三万五〇〇〇人のフィンランド人、一一四〇〇人の外国人が内戦で死亡した。

\*2 「市民戦争 (kansalaisota)」も厳密に訳すと「内戦」であるが、「内戦 (sisällisota)」との区別および言語のニュアンスを考慮して、本稿では「市民戦争」と訳す。

\*3 フィンランドは、一八〇九年から独立までロシア帝国支配下の大公国として一定の自治を有した。フィンランド大公国は、ロシアから任命されたフィンランド大公が統治したが、統治者層はロシア帝国支配以前の六世紀にわたるスウェーデン支配時代下の旧統治者層であるスウェーデン語系フィンランド人貴族を中心としたブルジョア階級であった。

\*4 「ロシア化」政策とは、ロシア帝国の安全保障を目的に辺境としてのフィンランドの防衛を強化するため、フィンランドの政治制度の変革を促す一連の政策を指す。

\*5 ブルジョア側がフィンランドの自治の回復を望んだのに対し、社会民主党および労働運動側は、「赤色宣言 (Punainen julistus)」を発し、そこで国民議会の創設や内政上の完全独立を主張した。

\*6 社会民主党は、他に失業者対策、地方行政改革、白衛隊解散、農民解放、税制改革、高齢身障者保険、「権力法」の承認、食料不足対策を要求した。

\*7 赤衛隊に参加したロシア兵の数は一千〜一万人と、研究

によって幅が見られる。たとえば、トゥオマス・ホップは、内戦勃発時に四万ものロシア兵がまだフィンランド国内に駐留したものの、実際に前線に参加したロシア兵は千人ほどであったとする。

\*8 戦間期におけるフィンランドでは、敗者の赤衛隊側に対する社会的差別が大きな社会問題となった。その象徴的な差別は、墓地と記念碑の扱われ方に顕著に見出せる。内戦後、白衛隊側で戦った兵士のための記念碑が全国各地で建立されたのに対し、赤衛隊側のための記念碑はおろか、戦死者の墓も教会の墓地には入れず、森や林の奥など隠された場所にしか埋葬することができないなどの差別が続いた。

\*9 内戦が終結する一カ月前の一九一八年四月から約一〇万もの赤衛隊側で戦ったフィンランド人らが収容所に追いやられた。一九一八年九月には一万二五〇〇もの収容所が閉鎖されたが、収容所にいた約三分の一の旧赤衛隊兵士はスペイン風邪で死亡したという。

\*10 アルヴィ・コルホネンが編集したこの二巻本のフィンランド史概説書は、石器時代から第二次世界大戦終結までが扱われ、時期区分の仕方など戦前の概説書とは大きく異なった編集で構成された。

\*11 パーシヴィルタは、フィンランド外務省史料館、ドイツ、スウェーデン、イギリスの外務省史料館や内戦に参加したドイツのバルト師団の史料といった外国の外交史料を用いて内戦を検証したが、ソ連側の史料を閲覧することはできなかった。

\*12 トルッパリ (torppari) とは土地なし小作農のことであ

る。一七世紀に誕生し、一九世紀終わりには七万人ものトルッパリが存在し、社会問題となった。独立後に土地改革とともにトルッパリも解放されたが、彼らの生活が改善されるのには時間がかかった。

\*13 たとえば、「白テロル」「赤テロル」と呼ばれた内戦中に起こった大量虐殺事件を扱った (Ravonlainen 1966:1967) 研究が登場した。

\*14 フィンランドの東側境界に隣接する地域、ロシア・カレリア (通称・東カレリア) は、一九世紀中葉から発生した民族ロマン主義思想において登場した民族叙事詩「カレワラ」の発祥地だとみなされ、さらにはフィンランド民族文化発祥の地として、フィンランドの「イレデンタ」の対象となった。一九一八年三月の内戦の最中、アクティヴィステイがフィンランド政府の支持の下、ロシア・カレリア、すなわち東カレリアに遠征し、この地をフィンランドに組み込もうとしたが、結局失敗に終わった。このようなロシア・カレリア獲得をめぐる問題は、フィンランド側から「東カレリア問題」と呼ばれた。詳細は、(石野二〇〇七) を参照。

\*15 三年前に発表した継続戦争に関する研究は、(Pohvinen 1964) を指す。

\*16 ベルトネンは、一九六〇年代は内戦がフィンランド民族共通の経験として考えられた時期であり、内戦解釈を平均化するよう試みられた時期でもあったと指摘している。

\*17 この研究の動機には、ラシラ自身がトルッパリ出身であったことが関係したとバイヴィオ・トンミラは指摘する (Tommila 1998:183)。

備を整えた。このことよって、これまで目目に触れない場所

所に建てられた赤衛隊の墓を地元の教会墓地に移送させる費用を負担することが決定された。さらには、赤衛隊のための記念碑の建立もなされた。また、一九六八年にケッコネン大統領は、大統領として初めて赤衛隊側の墓を訪問し、花輪を献上することで赤衛隊への配慮を行った。

\*24 たとえば、マンニネンの研究があげられる (Manninen 1992:1993)。この研究には国家から助成金が下りた。

\*25 ユリカンガスが主張する「中立」あるいは「中立性」とは、白衛隊側の見方でもなく、赤衛隊側の見方ではないという意味だけではなく、研究者としての客観的立場の強調だと筆者は推測する。

\*26 たとえば、フィンランド文学協会史料館には「一九一八コレクシヨ (1918 kokoelma)」労働者史料館の労働者回想録委員会には「回想録コレクシヨ (Muistelmakokoelma)」などが所蔵されている。

\*27 後に、個人資料を補足するための予算として七〇万マルッカ (約一四〇〇万円) が追加された。

\*28 インターネットでは犠牲者のデータベースが利用できる。

また、フィンランド語、スウェーデン語だけではなく、英語でも公開されている。http://vestanarc.fi/cgi-bin/db2www/sotasuhteistvu/main?lang=fi (二〇一一年九月二十五日) 国立文書館では、プロジェクトのアーカイブが一般公開されている。また、国立文書館のホームページでは、一九三九―一九四五年の第二次世界大戦期の戦争犠牲者のデータベースの検索が可能であり、戦争犠牲者に対するフィンランド政府の取り組み

\*18 このような研究の流れは、後の一九八八年に発表されたリスト・アラプロの内戦における革命研究に続いた (Alapuro 1988)。

\*19 イェーガー隊は、第一次世界大戦が勃発した一九一四年に、フィンランドが独立した暁には軍隊を創設するという目標を掲げ、約二千人がドイツで軍事訓練を受けた。彼らのほとんどが、内戦期に白衛隊として戦った。

\*20 このような、東の「野蠻」に対する西欧文明の前哨地としてのフィンランドという位置付けは、スウェーデン語系フィンランド人に限ったことではなく、フィンランドの一部の知識人の間で共有されてきた思想であり、戦間期に活躍した歴史学者ヤルマリ・ヤッコラらによって歴史記述にも反映された時代もあった。 (Jussila 2007: 40)

\*21 マンニネンは、白衛隊側の新聞の記事に登場する内戦の呼称を地域別に週ごとに集計した表を作成し、戦時中の二月から三月初旬にかけて東部フィンランドでは、「解放闘争」「解放戦争」の呼称よりも「市民戦争」「内戦」「兄弟戦争」の呼称のほうが頻繁に用いられた事実を明らかにした。

\*22 国際政治学では、このようなフィンランド・ソ連の間の関係を「フィンランド化」と名付け、ソ連の外交的圧力によって小国フィンランドの内政が操られたとみなされたが、フィンランドは最終的な政策については、自らの決定による政策の選択を行ったことが現在では明らかになっている (長崎二〇〇八:二〇三―二〇六)。

\*23 赤衛隊への偏見の排除に関して、フィンランド政府は一九四七年六月に赤衛隊の墓に関する法案の可決などの法的整

がうかがえる。http://kronosarc.fi/menehynne/ (二〇一一年九月二十五日)

\*29 Lars Westerlund, "Suomen sotasurmat 1914-1922-tutkimusprojekti- sisällissodan synnyttämän trauman purkaja", *Työväentutkimus* 2005 (インターネット版) <http://www.tyovaenperinne.fi/tyovaentutkimus/tt2005/nettiversio/tk3.htm> (二〇一一年九月二十五日) このプロジェクトには、ヘイッキ・ユリカンガス、オフト・マンニネンなど一〇名の大学教授および研究補助者が中心となり、役人なども一時的に参加した。

\*30 同書は、一九九九年に出版された冬戦争 (Leskinen & Jutilainen 1999) 二〇〇五年に出版された継続戦争 (Leskinen & Jutilainen 2005) に続くシリーズの三作目である。

\*31 たとえば、二〇〇六年の八学年 (日本の中学二年生にあたる) の歴史教科書 (Harri Rinta-Aho et al. 2006: 12-17) では、「解放戦争——市民戦争」という小題がつけられ、そこでは赤衛隊が「革命」に発し、白衛隊が「解放戦争」に出發した背景が描写されたが、最後には「内戦」の呼称が用いられるなど、一貫した呼称は用いられていない。

#### ●参考文献

石野裕子 (二〇〇七) 「フィンランドの国家形成とイレデンティズム——ナシヨナリズムの変容との関連に関する覚え書き」『北欧史研究』二四、一一八―一五〇頁。  
長崎泰裕 (二〇〇八) 「フィンランド化」という言葉——冷戦時代の亡霊のように」百瀬宏・石野裕子編『フィンランドを

知るための四四章』明石書店、二〇三—二〇六頁。

百瀬宏 (一九七四) 『東・北欧外交史序説』福村出版。

百瀬宏 (二〇〇六) 「戦後フィンランド試論——日本との関わりが何に見えるか」『北欧史研究』二二二・一—七六頁。

Ahtiainen, Pekka & Jukka Teronen (1996) *Muisteiden tutkijat ja meloisten varjot: Mäkeä suomalaisen historiankirjoitukseen*.

Helsinki: SHS.

Alapuro, Risto (1993) *Vallankumous. Historiallinen aikakauskirja*, vol. 2, s.114-116.

Alapuro, Risto (1988) *State and Revolution in Finland*, California: University of California Press.

Ehrrrooth, Jari (1993) *Kapina. Historiallinen aikakauskirja*, vol.2, s.102-105.

Hoppu, Tuomas (2009) Taistelevat osapuolet johtajat. Pertti Haapala ja Tuomas Hoppu (toim.). *Sisällissodan pikku jättiäinen*. Helsinki: WSOY, s.112-144.

Haapala, Pertti (1993a) Suuntaviivoja: yksi vai monta totuutta? *Historiallinen aikakauskirja*, vol.2, s.1.

Haapala, Pertti (1993b) Luokkasota. *Historiallinen aikakauskirja*, vol. 2, s.105-110.

Haapala, Pertti (2009) Sota ja sen nimet. Pertti Haapala ja Tuomas Hoppu (toim.). *Sisällissodan pikku jättiäinen*. Helsinki: WSOY, s.10-17.

Hari Rinta-Aho, Rinta, Mariama Niemi, Päivi Siltala-Keinänen, Olli Lehtonen (2006) *Historian tuulet* 8. Helsinki: Otava. (ハンリ・リント・アホ・ヤママーナ・シヘメーレン・ヤマ・

シルタラ・ケイナイネン、オッリ・レヒトネン著、百瀬宏監訳、石野裕子、高瀬愛訳『世界史のなかのフィンランドの歴史——フィンランド中学校近現代史教科書』二〇一一年、明石書店)。

Jussila, Osmo (2007) *Suomen historian suuret myytit*. Helsinki: WSOY.

Kuosa, Tauno (1963 泉 隆 1952) *Jokamiehen Suomen historia: Autonominen ja itsenäinen Suomi* IV. Porvoo: WSOY.

Leskinen, Jari & Antti Juutilainen (toim.) (1999) *Jalkosodan pikku jättiäinen*. Porvoo: WSOY.

Leskinen, Jari & Antti Juutilainen, (toim.) (2005) *Talvisodan pikku jättiäinen*. Helsinki: WSOY.

Linna, Väinö (1959-1962) *Täällä Pohjan tähden alla* 1-3. Porvoo: WSOY.

Linna, Väinö (1954) *Tuulenaton sotilas*. Porvoo: WSOY.

Manninen, Ohto (toim.) (1992-1993) *Isenäistymisen vuodet 1917-1920*. JIII Helsinki: VPAK-kustannus.

Manninen, Ohto (1993) Vapaussoita. *Historiallinen aikakauskirja*, vol.2, s.116-120.

Manninen, Turo (1982) *Vapausmiehen kansalaissoita ja kapina*. Jyväskylä: Jyväskylän yliopisto.

Meinander, Henrik (2006) *Suomen historia*. Helsinki: WSOY, 2006.

Paavolaime, Jaakko (1966-1967) *Poliittisista väkivaltaisuuksista eli punaisten ja valkoisten terroristien Suomessa* 1918. I-II. Helsinki: Tammi.

Paasivirta, Juhani (1947) *Suomen itsenäistymiskysymys 1917, I-II*. Porvoo: WSOY.

Paasivirta, Juhani (1949) Suomen itsenäistyminen. Korhonen, Arvi (toim.) *Suomen historian käsikirja II*. Porvoo: WSOY, s.421-468.

Paasivirta, Juhani (1957) *Suomi vuonna 1918*. Porvoo: WSOY.

Peltonen, Ulla-Maija (1996) *Punahapinan muistot: Tutkimus työväen muistelukerronnan muotoutumisesta vuoden 1918 jälkeen*. Helsinki: SKS.

Peltonen, Ulla-Maija (2003) *Muistitiin paikat: Vuoden 1918 sisällissodan muistamisesta ja muuttamisesta*. Helsinki: SKS.

Peltonen, Ulla-Maija (2009) Sisällissodan muistaminen. Pertti Haapala ja Tuomas Hoppu (toim.). *Sisällissodan pikku jättiäinen*. Helsinki: WSOY, s.464-473.

Polvinen, Tuomo (1967) *Venäjän vallankumous ja Suomi I: Helsinki 1917 toukokuu 1918*. Porvoo: WSOY.

Polvinen, Tuomo (1964) *Suurrallisten poliitikossa 1941-44: Jalkosodan tausta*. Porvoo: WSOY.

Rasila, Viljo (1968) *Kansalaisodan sosiainen tausta*. Helsinki: Tammi.

Tikka, Marko (2009) Sodan kokonaistapitot. Pertti Haapala ja Tuomas Hoppu (toim.). *Sisällissodan pikku jättiäinen*. Helsinki: WSOY, s.221.

Tommila, Päiviö (1998) Historian tutkimujan muotokuva. Helsinki: SHS.

Schoofield, George C. (eds.) (1998) *A History of Finland's*

*Literature*. Lincoln & London: the University of Nebraska Press.

Yahola, Jouko (2003) *Suomen historia: jääkaudesta Euroopan unioniin*. Helsinki: Otava.

Varpio, Yrjö (2009) Vuosi 1918 kaunokirjallisuudessa. Pertti Haapala ja Tuomas Hoppu (toim.). *Sisällissodan pikku jättiäinen*. Helsinki: WSOY, s.441-463.

Väisänen, Seppo (1993) Kansalaissoita. *Historiallinen aikakauskirja*, vol.2, s.98-102.

Ylikangas, Heikki (1993a) *Tie Tampereelle: Dokumentoin katuvaus Tampereen antautumiseen johaneista solatopuhunnista Suomen sisällissodassa*. Porvoo: WSOY.

Ylikangas, Heikki (1993b) Sisällissota. *Historiallinen aikakauskirja*, vol.2, s.110-114.

<http://vestanarc.fi/cgi-bin/db2www/sotasurinaetusivu/main?lang=fi> (二〇一一年九月十五日)

<http://kronos.narc.fi/menetytneet/> (二〇一一年九月十五日)

Lars Westerlund "Suomen sotasurinat 1914-1922-tutkimusprojekti-sisällissodan synnyttämän trauman purkaja". Työväentutkimus 2005 (ヘンター・ネン・ト) <http://www.tyovaentutkimus.fi/tyovaentutkimus/tt2005/netiversio/tk3.htm> (二〇一一年九月十五日)

(ユネスコ・データベース) 津田塾大学国際関係研究所